

佐和隆光『グリーン資本主義』（岩波新書、2009年）を読む

「グローバル『危機』克服の条件」という副題の本書を一気に興味深く読んだ。

世界同時不況は、石油と自動車を成長の牽引力とする20世紀型資本主義に終止符を打った。代わって、エコ製品の開発・普及を成長の牽引力とする「グリーン資本主義」の時代が到来しつつある。気候変動という災いを転じて、資本主義のグリーン化という福となることを願おうではないか。以上のような現状認識と期待をもとに書かれた本書は、第15回気候変動枠組み条約締約国会議（COP15）の最終日に刊行された。

筆者は本書で言いたいことを次のように要約している。地球温暖化対策（気候変動緩和策）は、けっして経済にとっての重荷ではない。のみならず、この制約を打破するための技術革新がエコ製品を生み出し、その普及がこれからの経済成長をけん引するだろう。もっと言えば、先進国経済のこれからの成長をけん引するのは、環境「制約」の克服に資するエコ製品の開発・普及を措いて他には見当たらないのである。「グローバルゼーションの曲がり角」という第9章の最後で、ケインズ主義的施策をグローバル化すること、そして先進国経済をグリーン化することが、人類の生存を可能にする必要にして十分な条件であることを記して、本書を締めくくる。

本書から多くの知見や示唆を得られたが、その主なものだけ記しておこう。再生可能エネルギーの普及と、それにとまなう公共事業、情報通信技術を駆使しての「賢い」送電網の整備（スマート・グリッド）をアメリカ経済再建のバネ仕掛けにしようとするオバマ大統領の新政策、「グリーン・ニューディール」を評価する。それと「90年度比25%削減」目標を掲げた鳩山イニシアティブをとりあげ、日米の新政権は、新しい産業革命の火蓋を切って落とそうとしていると指摘する。鳩山イニシアティブを葬り去ろうとして、計量経済モデルが「悪用」されるのを見て、計量経済学の研究に勤しんできた筆者の内心には、忸怩たる思いが募るばかりであるとも述べる。

本書の要約とも関連して、第6章「経済成長のパラダイム・シフト」の指摘も示唆に富む。経済成長の在来型パラダイムは「電力・石油と自動車」により象徴される。他方、経済成長の新しいパラダイムを象徴するのは「低炭素化、再生可能エネルギー、資源循環」である。経済成長の牽引力となるのは技術革新である。これからの技術開発は、新しいパラダイムと整合的でなければならない。

第9章冒頭の石油と交通機関についての指摘も、航空機や国際交流、観光の今後を考えるうえで参考になる。90年代に急進展したグローバルゼーションは、ヒト、モノ、カネ、情報の移動が安価になったことに起因する。ヒトとモノの移動に要するコストは原油高騰で跳ね上がる公算がきわめて高く、交通機関の脱石油の可能性が予想される。飛行機は技術的に高価格で環境負荷の大きいジェット燃料に頼り続けざるを得ない。おそらく、稀少なジェット燃料を使う飛行機の料金は数倍高となり、ビジネス・トリップは最小限に抑え込まれ、外国への観光はお金持ちしかできなくなる。

（2010年1月2日 記）